

“発見された”書状

小島 一仁

書状を読む

このたび、思いがけず、「大阪古典」の図録に忠敬の書状がのつて
いるということで、五月二十一日に、伊能陽子さんが、そのコピーを
ファックスで送って下さった。二十五日になると、その“発見”に關す
る記事が産経新聞にのつた。今回は、その書状を紹介し、気づいたこ
とを記しておきたいと思う。

まず、書状の原文と解読文をお目につけよう。最後に記されている
追伸の部分は、あまり重要とは思われないので省略する。

〈原文〉 下頁ご参照

〈解読文〉

八月十五日御翰十一月十三日 相届辱

致捧誦候、愈御揃御安全被成

御座珍重不少奉存候、随 下拙儀

無異儀薩州領も九月十七日迄 相済

夫 肥前国嶋原御預り御料所肥後国

天草郡天草嶋 相渡当月十二日

相済同十三日肥後国熊本領 引移

当時熊本領致測量候、乍憚

御安意可被下候、然、先年致久離候

稲女儀当夏中三郎治も致死去

其身も病身 相成近頃致落髮候 付

各様御一同御憐察之上御地頭所も

被仰立候 久離勘当差免し候様

別紙御連印を以委細被仰聞致

承知候、何様当時一人之身分

殊 落髮も及候儀各様御一同

御世話被下候御厚志 任御地頭向

宜候、勘当差免し可申候、即

三郎右衛門方へも各様御深意 随

勘当赦免之儀申遣候、乍此上宜

御心添被成下候様頼上候、以上

十一月十五日

伊能勘解由

永澤治郎右衛門様

伊能彦作様

永澤仁兵衛様

永澤半右衛門様

永澤吉郎兵衛様

永澤半十郎様

永澤太兵衛様

伊能平右衛門様

長女イネの勘当と復帰

この書状は、忠敬が、一八一〇年文化七十一月、九州測量中に、佐原村の永澤治郎右衛門ら八人の有力者、親戚に宛てて記したものである。主要内容は、後半に記されている長女イネの勘当赦免についてである。

イネは、一七六三年宝暦一三に、伊能忠敬・ミチ夫妻の長女として生まれたが、そのころ、忠敬は、自分と縁つづきの上総国山辺郡片貝村現在の千葉県山武郡九十九里町片貝の布留川家から一少年を養子に迎えていた。この少年は長じてから盛右衛門と称した。忠敬は、盛右衛門とイネをめあわせて、江戸の出店をまかせた。ところが、盛右衛門は、何か商売上の大失敗をしたらしく、忠敬は、それを怒って盛右衛門を離縁した。このとき、イネは、忠敬の意に背き、夫に従って家を出たため、忠敬は、イネをも勘当した。

その後、盛右衛門・イネ夫婦は、盛右衛門の生地である片貝村におもむき、そこで米穀商を営んでいたが、一八一〇年(文化七)四月に盛右衛門が病没したため、イネは仏門に入り、薙髪して妙薫と称し、忠敬の許しを得て佐原伊能家に復帰したのである。“発見”された書状に「三郎治」とあるのは盛右衛門のことである。

この盛右衛門・イネの離別・勘当一件については、一九一七年、大谷亮吉氏が、その大著『伊能忠敬』の中ではじめて発表したのであるが、その際、大谷氏は、イネの赦免について、「文化七年長女稲女難髪して名を妙薫と改め親戚故旧によりて忠敬に哀願し家に帰るや：」と述べ、「当時の文書伊能家に現存す」と註記している。

そこで、私は、一九五五年、伊能家先々代の伊能康之助・多嘉御夫妻から、伊能家文書の閲覧・調査を許可されて以後、その文書をさが

しつづけたのであるが、伊能家文書の中からは、ついに見つけ出すことができなかった。

ところが、今度、大阪で“発見”されたという書状を一読して、私は、この書状こそ、大谷氏が指摘した「文書」なのではないかと思つた。時期も大谷氏が書いていることと一致するし、内容的にも大谷氏が「親戚故旧によりて忠敬に哀願し」と書いているのと一致するのである。

この書状は、大谷亮吉氏が、明治末年に、佐原伊能家の史料を調査したときには、たしかに「伊能家に現存」したのであるが、その後、如何なる理由によつてか、伊能家から流出したものと思われる。

“勘当論争”

この書状の発見に関連して、五月二五日付の産経新聞は、次のように記している。

「…：相場に失敗した稲の夫で娘婿の盛右衛門景明を忠敬が離縁した際、稲は夫について行き勘当されたとの説がある一方、証拠がなく『あれだけ尽くした娘を勘当するはずがない』との“論争”が続いていた。」

そして、今度の書状の“発見”によつて、その“論争”に終止符が打たれたかのような書き方をしている。

だが、そのような“論争”があったということ、私は、一度も耳にしたことがない。大谷氏が盛右衛門・イネの離別・勘当について書いてから、イネの勘当という事実があったことを否定した人は、おそらく、いなかったのではなからうか。

しかし、そのこととは別に、最近、イネの勘当についてあやまった認識が広がっているのは一つの問題である。イネの勘当は、大谷氏が

指摘したように、夫の盛右衛門の失敗に起因するのであるが、この数年の間に激増した忠敬関係の出版物を見ると、イネの勘当の原因が盛右衛門との結婚問題にあったかのように書いているものが少なくないが、それらは事実には反する。

このまちはいは、最初、一九七九年に出版されたF氏（故人）の著書からおこったのであるが、以後、研究者といわれる人たちが、F氏の史料読み取りに決定的な手落ちがあったことに気づかず、いわゆる“孫引き”で自著にとり入れたために広がったものと考えられる。そして、そのまちはいは、残念ながら、わが『伊能忠敬研究』誌上にもあらわれているのである。（第26号・45ページ、57ページ）

このことの批判や事実の解明については、近日中に、改めて、くわしく書いたものを発表するつもりであるが、この機会に、とりあえず問題の所在だけをお知らせしておきたいと思う。